



20年来グローバル コミュニケーションズ エキスパート。元JAXAエグゼクティブ アドバイザー(広報・国際担当)、国立大学法人山口大学客員教授(国際関係+コミュニケーション論)、評論家・オピニオンリーダー。東京生まれ、英国育ち。講演、テレビ、執筆、政府委員など、マルチに活躍する中で、IRと都市開発のコンサル会社代表も務める。
http://www.nishiuramidori.com

連載 第9回

“国際派大和撫子”が伝える宇宙の開発現場

にしうらみどりの

「宇宙の窓から」

イプシロンロケット

この連載4回目で、日本の有人飛行船開発が待ち遠しいと書きました。

そのことは今でも変わりませんけれど、有人用ではないところで、日本独自、国産技術から生まれたイプシロンという画期的なロケットが、9月14日に内之浦宇宙空間観測所から美しい打ち上げを遂げました。

打ち上げ延期など紆余曲折はあったものの、これぞ革新技術、「未来を拓くロケット開発」とい

えるのではないのでしょうか。

イプシロンロケットと今までのロケットとの違いは多々あります。まず最大ファクターは、開発、打ち上げコストが大幅に節約できたということでしょうか。

いわば、シンプルな固体ロケットとコンパクトな射場のコンビネーションが費用だけでなく、打ち上げ一連の作業に有する時間の短縮も可能にしてくれました。

こうした夢のような成功を緋いてみると、自動化・自立化技術こそが源になっています。

今まで人間が実施していた電気系点検作業や結果評価を機体と地上設備のコンピューターが瞬時にやってくれるのです。

すべては、筆者が愛してやまない薔薇のおかげ？なんて謎めいた洒落の謎解きができた読者の方々は、その証にぜひ薔薇を送ってください(笑)。

冗談はともかく、この

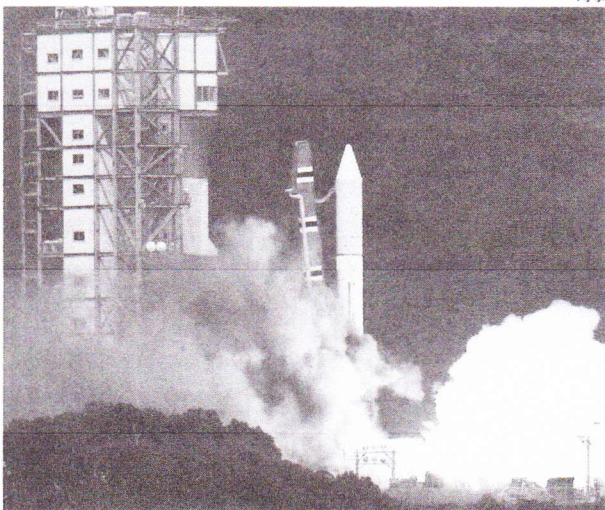
場合、薔薇はバラでも、お花の薔薇ではなく、ROSEです。訳すと、即応型運用支援装置。英語では、Responsive Operation Support Equipmentなので、頭文字をとってROSE。

これは、今まで地上設備を受け持っていた作業の大部分を、機体そのものをインテリジェント化することによって、コンパクトな発射管制システムや点検支援機能が瞬時に実行できるということですよ。

すなわち、準備、点検、後処置にかかっていたかなりの手間と時間を省くだけでなく、点検と結果評価が瞬時に実行できたということにもなります。

これらだけを考えても、世界初のロケットが、我が国の技術によって生まれました。筆者も国民の1人として、皆様同様、感動と誇りに胸を熱くしました。

世界一の運用性ともいえるイプシロンは、小型衛星計画にも充分こたえられますし、ここには書ききれないくらい、他にも様々な成果が得られ、目標もかなり達成されました。



新型国産ロケット「イプシロン」